



[1 分] 花屋 [小
説]



kukuru

花屋

『花屋』と呼ばれるバーに1人の男が客で来ていた。

その男は色落ちしたスーツを着た、見るからに冴えないサラリーマンだった。

動画が止まったように無表情なその男は、頬杖をつき、ひたすら強い度数のカクテルを飲んでしたが、

やがて大きなため息をつきバーテンダーに話しかけた。

「なあ、兄さん。俺はもう何年も笑ってないんだよ。

それどころか泣きもしないんだ。感情なんて無駄なものが、どうやら消えちゃったらしい。」

兄さんと呼ばれた若いバーテンダーは、手を止め横目で男の方を見たが、

すぐにまたグラスを拭く作業を続けた。

男は最初から話しをする相手などいないかのように喋り続ける。

「異常だと思うか？思わないだろ？だからオカシイんだ。

周りをみても同じなんだよ。よくある話しなんだ。みんな俺と同じ顔をしてるんだよ。

だけど、その方が効率が良いからな。人と違うとか障害になるだろ。感情も気分もそうだ。

障害だ。何かしらの目的の為の。目的か、一体誰の為の。同じ顔の奴らのためのか。

いや、もういい。考えるのは無駄だ。兄さん、美味しいオリジナルをつくってくれよ。」

頷いたバーテンダーはアレコレ混ぜてシェイカーを振り、グラスに注ぐと客の前に差し出した。

それを男が手に取ろうとした時、ペッと唾をグラスに入れた。

「何してんだ」

男は怒鳴り声をあげた。

「なんだ、おっさん。怒れるじゃねえか」

男は一瞬ポカンとしたが、ばつの悪そうな、ぎこちない笑顔をバーテンダーへと向けた。

「自分の感性に水やりしないのは、自分が悪いんだぜ。」

「ああ、全くその通りだな。花屋のバーテンダーさんよ。ありがとよ。」

男はそう言い残すとカクテルを飲み干し店を出て行った。